

	た。				つずつ加えて3 つに印をつけた。	答えてもめち ゃくち*である。
	(2) 左右の弁別					
	○旗を持った男の子(3人)	×	×	×	×	×
	○縦一列に並び違いを区別させ、 また横に並ぶをくり返す。	◎	◎	○	×	△
	○ねこのしっぽ(4匹)	×	×	×	×	×
	○3匹のねこに構成し直し、教師 の実際の範示をプリントをする 前に加えるなどして判断の補助 をした。	*実際に教師が手を上げて見せたが、すぐには判断がつかなかった。 *上記の3人の男の子の時も理解が困難であったのに、数が4に増えた上にし っぽの方向を判断するのは難しいのではないか。				
		一匹ずつ自分で 判断して○	助言を与えて判 断させて○	個別指導で一匹 ずつ確認して○	個別指導で一匹 ずつ確認して△	口から出まかせ に答える。×

当然、落ち込み領域のみの訓練が、子どもの視知覚能力を伸ばすとは考えていないが、まず取
り組みをここから始め、全領域での訓練・生活場面・学習場面での応用を考えて取り組んでいる。

7 研究主題と保護者との連携

「豊かな心をもって、たくましく行動する」子どもの育成に、保護者との連携協力を無視して
はならない。学校での指導の実践の場は、その大部分が、家庭における保護者にまかせられるわ
けであり、反対に、家庭生活での子どもの生活実態は、そのまま学校生活に生かされなければ、
効果的な指導とはいえない。保護者と教師と子どもの一体となった取り組みが子どもを育てるの
である。このことは、研究紀要第3集「表現化に視点をあてた」取り組みにくわしく述べている
ので参照されたい。(註3)

8 研究主題と教師の態度

教育目標を設定し、「生きて働く力」を育てる学習過程・効果的な指導法が確立されたとして
も、実際に授業で子どもとあ対していくのは教師自身である。教師自身が、研究主題をふまえ
た授業実践の力量を十分身につけておかなければ、目標達成は不可能である。

すなわち、教師自らが、日々の生活の中で、「豊かな心」を育て、「たくましい行動」を心が
けて、たゆまぬ努力をすることこそ大切である。言い換えると、教師のやる気こそが、子どもを
育てると言うことである。

以上、中学部の研究主題との取り組みについてその基本的な事柄について述べた。しかし、そ
の取り組みは緒についたばかりであり、実践の内容も貧弱である。しかし、問題点はしっかりお
さえているので、今後の実践で説明していかなければならないと考えている。

ここでは、項をあらためて、実践の一部を述べてみる。(山里 一夫)

◎ 参考文献

- 註1) 研究紀要第1集 表現化に視点をあてた教育課程の編成 (P. 16)
 註2) 研究紀要第3集 表現化に視点をあてた教育課程の編成とその展開 (P. 17～18)
 註3) 研究紀要第3集 表現化に視点をあてた教育課程の編成とその展開 (P. 12)